The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「大大阪」の工業化・都市化と乳児死亡 : 20世紀前半の大阪市とその周辺の生活変化
Author(s)	樋上, 惠美子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34018
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　樋上惠美子　）	
論文題名	「大大阪」の工業化・都市化と乳児死亡 ：２０世紀前半の大阪市とその周辺の生活変化

論文内容の要旨

本稿の目的は、

①女子の労働強化が母胎・母体を貫いて内生的要因のため新生児死亡多数から外生的要因が乳児に直接影響する乳児死亡の転換点を、大阪の女子の労働と生活水準によって検証する。

②女子の生活水準という分析視角から農村からの移住者の世帯形成とその生活変化を、先天性弱質、脚気、下痢、呼吸器疾患の時系列な乳児死亡の変化から確認する。

③これらの背景にある栄養・生活環境・生活状況を分析する。

第1章

日露戦争期に産業の重工業化が本格化し、第一次大戦期にかけて発展すると、それまで独立できない職工や職人と紡績女工などとの結婚が可能となった。新世帯の妻は生産労働から退いて家内へ移ったことにより労働量が急速に減ったことで、先天性弱質死亡率、新生児死亡率（出生千に対する）を低減させることができた。

第2章

大阪の新世帯の労働者や職人は麦の混食をやめ、取るべき栄養総量の8～9割を白米から摂取したため脚気死亡が増加した。この高い地域は労働者の居住地やスラムで生活状態や栄養が悪く、妊婦は脚気でも治療を受けないため、授乳は乳児を脚気にすることを知らない母親が多く、脚気が引き金になって、彼らの乳児は下痢、呼吸器疾患と連鎖をおこし新生児でない乳児の死亡率を高めた。

第3章

女工の発育期の深夜労働が貧血罹患を余儀なくし、食事の量と蛋白質の不足は女工を虚弱な体質に導き、母親となったとき乳汁が不足しやすかった。故郷を離れ、乳児が乳首から飲めなくても哺乳法を教える親がいないため、練乳を飲ませ結局母乳が出なくなった。練乳の希釈量を乳児の月齢に合わせなければ乳児は消化不良をおこし下痢となって多くが死亡した。

第4章

1925年、大阪市は西成郡、東成郡を編入して日本で最大の都市となった。住宅が不足し労働者家族は2～3世帯が1軒の家に暮らしたが、実質賃金が増加し1軒の借家を求め住環境は改善した。呼吸器疾患死亡率は東成区が最低の西区の2倍以上あった。大阪市は高死亡率地域に保健所と育児相談所を開設し、乳児死亡率は1940年に100を切り全国平均よりも低くなった。

大阪市の生活水準は戦争と関係している。日露戦争で労働者は世帯形成のきっかけをつくり、その世帯は第一次世界大戦の好景気によって妻が専業主婦になる世帯収入を得た。そして、満州国成立後の好景気期に誰もが治療を受けることができる生活水準に近づき、日中戦争期に保健所など本格的な公衆衛生体制が進んだ。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　樋上惠美子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	友部謙一
	副 査　教 授	阿部武司
	副 査　准教授	山本千映

論文審査の結果の要旨

本稿の目的は、①女子の労働強化が母胎を通じて影響する内生的要因による新生児死亡と出産後の外生的要因による乳児死亡のそれぞれの転換点を、大阪に暮す女子の労働と生活の変化によって検証すること、②女子の生活水準という分析視角から、農村からの移住者の世帯形成とその生活変化を、乳児死亡原因である先天性弱質、脚気、下痢、呼吸器疾患死亡率の時系列な変化から確認すること、そして③これらの背景にある栄養・生活環境・生活状況の相互関係を考察することである。以下に各章の要旨を記す。

第1章では、日露戦争期に産業の重工業化が本格化し、第一次大戦期にかけて発展すると、それまで独立できなかった職工、職人や紡績女工などの結婚が可能になってきたこと、さらに、新世帯の妻は生産労働から退き家内労働へ移ったことにより、労働量が急速に減ったこと（内生的要因の改善）により、先天性弱質死亡率や新生児死亡率を低減させることができたことが実証されている。

第2章では、大阪の新世帯の労働者や職人は麦の混食をやめ、取るべき栄養総量の8～9割を白米から摂取したため脚気死亡が増加したこと、その脚気死亡の高い地域では、労働者居住地やスラムゆえ生活状態や栄養が悪い中で妊婦が脚気治療を受けず、授乳により乳児が脚気罹患することも知らなかったため、母体を介して乳児も罹患し下痢、呼吸器疾患と連鎖をおこし、乳児（新生児以降）死亡率が高まったことが実証された。

第3章では、成長期の女工の深夜労働が貧血罹患をもたらし、その食事の量と蛋白質不足が女工を虚弱な体質へ導き、母親としての母乳が不足したこと、また彼女たちが故郷を離れていたため母乳哺育法を教える者がおらず、練乳を飲ませたために結局母乳の供給量が減少したことが示された。それにより、練乳の希釈量を乳児の月齢に合わせられなければ、乳児は消化不良をおこし下痢が原因となって死亡した。

第4章では、1925年に西成郡、東成郡を編入して日本で最大の都市となった大阪市では住宅が不足し、労働者家族は2～ 3世帯が1軒の家に合同で暮らしていたところ、実質賃金が増加したことによって別個の借家が可能となり住環境は改善したことが示された。しかし、呼吸器疾患の死亡率については依然として東成区が最悪であり、西区の2倍以上に相当した。それに対して、大阪市はとくに高死亡率地域に保健所と育児相談所を開設し、その結果乳児死亡率は1940年に100パーミル以下となり、全国平均値よりも低くなった。

最後に、大阪市の生活水準は総じて戦争状況と密接に関係していた。日露戦争で労働者は世帯形成の契機をつくり、その世帯は第一次世界大戦の好景気を契機に、妻が主婦になりうるような世帯主収入を獲得するようになった。そして、満州国成立後の好景気期になると、だれもが平均的な医療を受療できるような生活水準に近づき、日中戦争期になって保健所など本格的な公衆衛生体制が整備された。

［審査結果の要旨］

本論文は国内最大級の工業化と都市化のさなかにあった20世紀初頭の「大大阪」（大阪市とその周辺地域）に暮らした主に都市下層の人々が、都市化・工業化の負債を背負いながらも、当時国内最悪であった乳児死亡状況を、世帯形成を主軸に、行政による政策的援護やソーシャルキャピタルの形成と活用を通じて、見事にそれを改善したその歴史的経路を豊富な統計と一貫した明確な論理で分析することに成功した。近代日本の生活水準研究を大きく引き上げたその功績は甚大であり、博士（経済学）の学位に十分に値するものと判断する。